

「胃 X 線診断の考え方と進め方」

市川平三郎 国立がんセンター病院長

吉田 裕司 北海道対がん協会検診センター内科医長

奈良県立医科大学教授

打 田 日出夫

わが国における胃 X 線診断学が、今日欧米先進国のレベルを遙かに凌いで世界の最先端を歩んでいるのは市川平三郎先生をはじめとする多くの共同研究者のご努力によるものであることは、今更述べるまでもないことである。X 線二重造影法の開発により微小病変が鮮明に描出されるようになり、早期胃癌の発見率が急速に上昇した実績は、胃 X 線診断の革命的進歩として歴史に刻まれるであろう。胃微細病変の X 線診断と内視鏡診断との競合ならびに手術・病理組織所見との綿密な対比と X 線診断へのフィードバックは、画像診断の精度向上に直結する重要な基本的姿勢として評価されており、この胃 X 線診断の臨床的研究手法は他の臓器においても模倣され、画像診断の臨床研究における指針となった。

しかし、最近、胃 X 線診断はあまりにも普及したために安易に流れ、

非常に大切であるにもかかわらず、陳腐な感覚すら与えがちになってきた。このような時期に市川・吉田両先生により上梓された本書は、胃 X 線診断学に再び新鮮さを与え、胃 X 線診断が興味深い深遠な学問であることを改めて教示した。市川先生らによる名著「胃 X 線診断の実際」(文光堂、1964) が刊行されから 20 年以上が過ぎた現在、その後の進歩と新知見が盛り込まれた著書の出版が待ち望まれていた矢先、この要望がかなえられたわけである。

本書の最も大きな特徴は、経験に頼りがちであった胃 X 線診断学を理論的に整理・体系化し、客観性を重視した考え方の基本を理論的に理解することにより、これまでよりも効率的に胃 X 線診断を習得できることを目指していることである。胃 X 線診断を撮影法、読影、鑑別診断に 3 大別し、これらについて詳述してい

るが、特に胃 X 線診断の成り立ちと診断法に重点が置かれ、そして他書の追従を許さない最も特色があるのは第 3 章の胃 X 線読影法である。充盈像、二重造影像ならびに圧迫像の読影に関して、読影の基本、異常の発見、異常の分析の 3 項目に分けてわかりやすく記述されている。胃 X 線異常像の成り立ちの理論を、多くのシェーマを取り入れて具体的に理解させる努力が払われており、この理論を実例から実証して読者の理解度を高めるための鮮明な X 線像が要所に呈示されている。文献などからの引用ではなく、すべてが長年にわたって積み重ねられた経験と考え方の集大成である。

日常診療と教育のみでなく研究における必読書として、放射線科、内科を問わず、胃 X 線診断に関与する医師、放射線技師の多くの方々に、是非とも一読していただきたい。きっと胃 X 線診断の妙味を再確認し、早期胃癌発見への情熱を高揚させる機会が与えられることであろう。

本書が末永く胃 X 線診断の指針として愛読されることを確信して、今度の発刊に心から感謝とお祝いを申し上げます。

B 5 判, 334 頁, 12,000 円, 送料 400 円, 1986 年

医学書院 刊